

地下室の手記

ドストエフスキー著 江川卓訳

改版 新潮社 1993 (新潮文庫)



文学部教授 大庭 健

「地球は青かった」(ガガーリン 1961 年) みなさんが生まれるより、さらに20年以上も昔のこと、宇宙では人類初の有人飛行、地上では技術革新・高度成長の幕開け、私の高校時代(1962-65 年)は、世をあげての理系ブームだった。

そのころ私は、数学や物理もそれなりに得意だったので、当然、理系に進むものと周囲も教師も思っていたらしい。しかし本人は高2の途中から急激に勉強する気がなくなり、授業をさぼって手あたりしだいに本を読む毎日となった。そんな時に会って、もろにはまったのが、ドストエフスキーの『地下室の手記』(当時の題名は、『地下生活者の手記』)だった。私は、わりと本をよく読むたちだったが、ここで出会った意識と生のからみあいの凄まじいリアリティは、それまでに接した文学が、とりわけ太宰や三島のようなものが、あまりにも薄っぺらで読んでいるほうが気恥ずかしくなるくらい、強烈だった。

もし、この出会いがなかったら、そしてここからはじまってドストエフスキーの一連の大作やキルケ

ゴールの小品に耽溺することがなかったら、私の高校生活は、したがってその後の人生行路もまた、確実に違ったものになっていただろう。なにしろ、もともと生意気なことに(というよりも素朴にも)、「理系の勉強なんぞは、いくら解法が多様でもしよせん正解はひとつに決まっているのだから、いずれ機械にやらせることではあっても人間がやることじゃない・・・」という気になっていたところへ、ドストエフスキーのあの不条理きわまりない自意識の世界である。高3の夏になって、よし受験勉強とやらをやったろうじゃんと思うようになった頃には、「文学部以外は、しよせん高等就職予備校にすぎないのだから行く価値もない」と思うようになっていた。(大学で教えるようになった今でも、かなり本気でそう思っているのだから、困ったものだ)。とまれ、人生の深遠・奈落の底から紡ぎだされたすぐれた文学は、魂の奥底を揺り動かして人生を一変させる力をもつのだ。

「分ける」こと「わかる」こと

坂本賢三著 講談社 1982 (講談社現代新書)

文学部教授 荻原 幸子

なんとなく気を引く「タイトル」と“要するにこの書物は、読者が明日から、世の中が違って見え、いままで見えなかったものが見え、人間同士の付き合い方が新しくなるように願って書いたものです。”というお得感のある「はしがき」とはいえその後はといえば、“『華嚴経』の原型をなしているのは「十字品」で、これはもと『十地経』と呼ばれた独立の経典であった。”『ソピテス』では、ソフィストと哲学者の相違を明確にすることが話題になっている。“二分法に対する彼の批判は『動物部分論』の第一巻に出てくる。”などという文章の連続である。端的にその内容を表せば、古今東西の哲学者や思想



家が、いかに「分ける」ことによって「わかれよう」としたかという形跡が綴られているということになる。著者によれば本書は、「哲学入門」でもあり「認識論」「比較思想論」「日本人論」でもあるとのこと。

結局のところ私自身は、そのすべてを理解するに至らず、大いに面食らいつつも、とにかく読み進めるのみ。読後感は、「圧倒されました」のひと言に尽きる。ひたすらに「分ける」と「わかる」を探求する著者のエネルギーを、存分に吸収した。少々情けないが、こういう読書体験もまた一興かとひとり悦に入りつつ、みなさんにもお勧めする次第である。